

【6】江戸時代に大井川に橋が無かったわけは？

「箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ大井川」と謡われたように、江戸時代の大井川には天下の東海道なのに橋が架かっていませんでした。旅人は川人足を頼んで「徒渡り（かちわたり）」を余儀なくされ、川人足に肩車をしてもらうか、料金をはずんで連台で運んでもらうしかありませんでした。運悪く洪水に出くわすと「川留め」と称して何日も渡れず、宿場に長逗留して散財させられました。

大井川に橋が架けられなかった理由は、「江戸の防備のため」というのが通説ですが、歴史家ではない人からは疑問が呈されています。

東海道を名古屋から東へ下ってくると、多くの河川を渡ることになります。岡崎の矢作川、吉田（今の豊橋）の豊川には橋が架かっていますが、その後の浜名湖の出口、天竜川、大井川、安倍川、富士川、酒匂川、相模川そして江戸の手前の六郷川（多摩川）には橋がありません。

このうち、渡し舟による「舟渡し」は、浜名湖（今切の渡し）、天竜川、富士川、相模川、六郷川で、「徒渡り」は大井川、安倍川、酒匂川です。

徒渡りの3河川には共通した特徴があります。いずれも急流河川で多量の土砂を運搬し河原は平らで広く、ふだんの流れは細い滞筋が多数網状に分流していることです。ひとたび洪水になると広い川巾一杯になり、流勢は強く、河床も洗掘されます。小さいスパンの橋脚が何十基も立ち並ぶ木橋には全く不向きな河川の状況です。また、木材が腐食しやすく、通常のヒノキ材では20年くらいしかもちません。

隅田川下流部の最初の橋である両国橋は、明暦の大火のあと1659年に架けられたのが始まりですが、江戸末期までの約200年間に経年劣化、水害、火災のため10回も架替られているので、平均20年に1回です。

六郷川（多摩川）は「舟渡し」と申しましたが、実は江戸時代初期には六郷橋が架かっていました。それも家康の時代の1600年に竣工した由緒あるものです。ところが毎年のように多摩川の洪水に襲われ損傷が激しく、完成後13年にして大修理がなされ、その後も修繕と改築がくり返されました。たまりかねた江戸幕府は1688年に完成して間もない新橋が大破したのを機に「舟渡し」に切り替え、以後、明治7年(1874)にいたるまで186年間渡し舟の時代が続きました。

こうしてみると、急流河川で洪水の多い、しかも川巾1000mもの大河、大井川の架橋に江戸幕府が二の足を踏むのは当然のことです。

従って冒頭の標題への回答は、「大井川への架橋は技術的に困難が多く、いったん架橋するとその後の維持管理、修繕、再改築に莫大な費用がかかるから実施しなかった。」といささか夢もロマンも無い答えになります。

なお、この結論は他の大河川についてもほぼ同様です。